

21世紀の日本のかたち（79）

地域学（その5）

－新宿学から中野学へ－



戸沼幸市

（一財）日本開発構想研究所 代表理事

1. 早稲田大学、社会人スクール、エクステンションセンター中野校の開設

2014年4月に新宿区に隣接する中野区のJR中央線中野駅北口に面する四季のまちに、早稲田大学は中野国際コミュニティプラザを開設しました。現在、早稲田大学の海外からの留学生は4,000人を超えており、この施設は留学生のための学生寮として建設されましたが、日本人学生との相部屋が原則です。グローバル（グローバル＋ローカル）時代、中野区に小さな地球村が出現した図です。

そして同時に、この中野国際コミュニティプラザに、早稲田大学エクステンションセンター中野校が開設されました。

早稲田大学中野国際コミュニティプラザ



（戸沼撮影）

早稲田大学オープンカレッジ・エクステンションセンターは、新宿区戸塚の大学本部キ

ャンパスを活用して、1981年に早稲田校を開設して、30年余を経過しましたが、多くの講座を設けて地域社会に広く開放され、現在、登録人数は3万人を超えております。また、中央区に八丁堀校（2001年開設）があり、この中に江戸東京の下町についての地域学習の講座などが設けられております。

早稲田大学エクステンションセンター早稲田校では私自身、2004年から地域学習の講座として「新宿学」を開講し、この10年間春学期、秋学期各10回、今年2014年12月で200回を数えることとなります。受講生は延べ6,000人にもなります。

「新宿学」では、新宿のまちの発展を歴史的、文化的に位置づけ、地理地形や土地利用、都市計画の要素を視野に入れながら、そこで展開された人々の営為を探り、このまちの未来をも探したものです。

「新宿学」200回の講義には、新宿に縁の深い多くの「新宿人」が講師として参画してくれました。「新宿学」は新宿をタテ糸につなぐ講師陣とこれをサポートした受講生6,000人の共同作業でした。受講生とは幾度もまち歩きをしました。

昨年（2013年）には地元の出版社、紀伊國屋書店から講座をまとめて「新宿学」を出版

することができました。

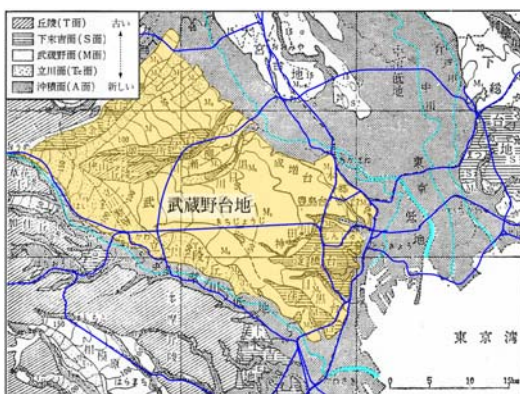
先日(10月21日)、早稲田大学エクステンションセンター中野校開設を記念して、「新宿学」から「新宿・中野学」へという題目で、早稲田大学大隈小講堂で話しをする機会がありました。

既に、八丁堀校では「東京下町学」といったものを「新宿学」の共同企画者である早稲田大学理工学術院の松本泰生氏たちが始めております。

2. 新宿学から中野学へ

中野区(面積15.6km²、人口31.4万人)は、新宿区の西側に隣接しています。この地域の地理・地形は、新宿区と同様に武蔵野台地にあります。中野は文字通り、武蔵野の真ん中にあることに由来しています。

東京周辺の地形図と武蔵野台地



資料:「東京の自然史(増補第二版)」(貝塚爽平)に加筆

中野区については、新宿区同様に縄文以来の人間居住の痕跡がありますが、江戸時代は江戸朱引(大江戸)のちょうど外側で、そして武蔵野の台地と江戸を結ぶ青梅街道の一番目の宿場が中野宿でした。土地利用としては農村が点在する農地と林地として推移しました。

江戸朱引(大江戸)図



資料:国土地図(株) ホームページに掲載されている江戸朱引図に加筆

中野区の旧町名に^{かこい}囿町がありますが、これは江戸時代、徳川五代将軍綱吉が生類憐れみの令によって保護された犬をこの地域に囿ったことが由来とされています。また、同じく旧町名の桃園町は、江戸徳川八代将軍吉宗が、桃の花園をつくり、江戸町民の行楽地としたことの名残です。吉宗は他に飛鳥山の桜の園、御殿山の桜の園と、三つの花名所を江戸郊外につくり、江戸町民の引き締めと解放を政治的に図ったのでした。

中野御囿 犬屋敷



注:元禄15(1702)年には5の囿があり総敷地面積約26万坪(東京ドームの約18.5個分)、野犬数は多い時で約8万2千頭を収容。(東京百年史)

江戸から東京へ、時代は19世紀ヨーロッパ発の産業革命(エネルギー革命)の波が日本に入った第一の場所が東京でした。日本は鎖国から開国へ、江戸徳川幕府の江戸城は天皇制国家の首座となり、江戸は東京(東の京)

に都市の名前も変えました。日本の交通インフラは明治・大正と人・馬系から鉄道に変わりました。全国津々浦々に鉄道が張り巡らされましたが、その起点となったのは東京駅(新橋駅)です。そして新宿駅もまた交通上重要な位置を占めることになりました。

明治18年(1885)、鉄道山手線ルートと青梅街道の交差点に、鉄道の新宿駅がつけられましたが、以後、新宿駅は人や物、情報、経済の一大結節空間に成長してゆきました。

明治22年(1889)、中央線(当時甲武鉄道)が新宿から東中野までカーブして北寄りに、そこから立川まで武蔵野の真ん中を直進してゆきました。中間駅は中野、武蔵境、国分寺の三駅でした。当初は薪炭、石灰、砂利輸送の貨物車でした。

中央線は明治37年(1904)複線化、明治39年(1906)国有化となり、西側郊外に延びるこの沿線は徐々に宅地化が進みました。

そして大正11年(1922)の関東大地震災によって、東京下町からの被災者が新宿から中野、杉並へ大きく移住することになります。

昭和年代になり、昭和2年(1927)、高田馬場～東村山間を武蔵野鉄道(西武の前身)が開通、昭和7年(1932)、中央線御茶の水から中野が複々線化して交通インフラが充実した時期に、昭和7年(1932)、豊多摩郡中野町と野方町が合併して中野区となりました。戦前、中野区は、杉並区と共に名実ともに東京西側の主要な居住地に成長してゆきました。

中野区には戦前、やや特異な施設、電信隊、気球隊、監獄用地、陸軍中野学校がありました。戦災で中野駅南側一帯の住宅地などは大きな被災を受けましたが、昭和21年(1946)中野駅南口、北口の都市計画決定を行い、駅

前広場改修の素地を用意しております。

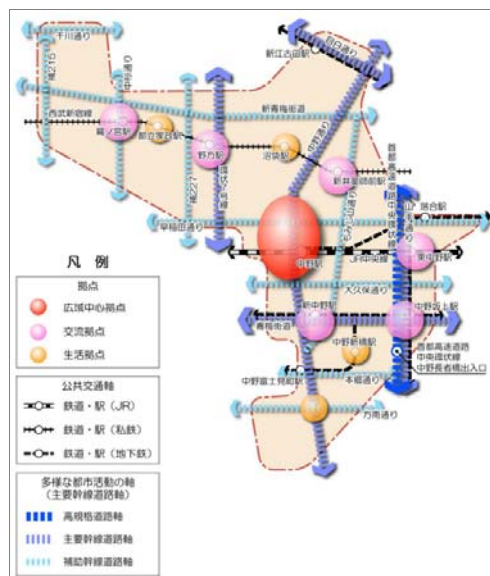
昭和48年(1973)には中野サンプラザ、中野ブロードウェイの建設、これを核として中野駅前には新宿と一味異なった中央線有数の盛り場を築きました。

中野区は縦に長い形状をしており、横軸の中央線沿いの整備に比較して、木造密集地帯を通る縦幹線を如何に確保するかが課題と見受けられます。これは区内の木造密集地帯の防災と関連することです。

平成年代に入り中野区の土地利用は、平成13年(2001)警察大学校(旧中野学校)府中移転、東京警察病院飯田橋から移転と大きな変化がありました。これに対応し、中野駅北口の一画には新しいオフィスや大学が進出してあります。

帝京平成大学、明治大学、早稲田大学国際コミュニティプラザが立地し、中野四季の都市づくりと合わせて新しい都市づくりが始まっております。

中野区 基本的なまちの構造
(区民生活に活力と文化を生み出すインフラ)



資料：中野区都市マスタープラン(平成21年4月改訂)

新宿学から「中野学」へ

早稲田大学エクステンションセンター中野校講座に中野学—中野区の地理・地形、歴史そして未来を考究する地域学を開設するのは如何なものかと早稲田校の「新宿学」を10年間200回、多数の講師を招いての講義を重ねた経験から大学に進言しているところです。

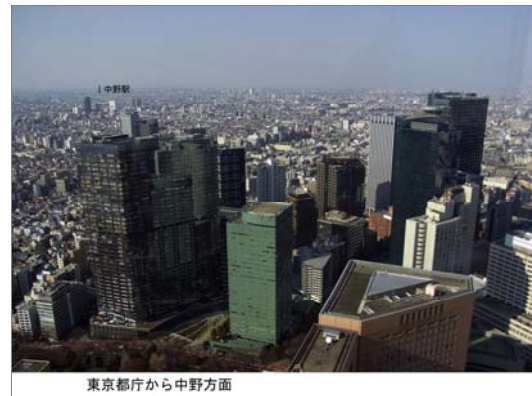
新宿学につなげて「新宿・中野学」という案でもよいかもしれません。

中野学の取り上げるテーマとして、JR中央線の直線性のつくり出す中野、高円寺、阿佐ヶ谷、荻窪など沿線都市の文化と、対照的な曲線の西武新宿線のまちの表情の現れ方、文化の発現といったとの比較も面白いと思います。

東京に関する地域学として「渋谷学」「池袋学」など、東京23区それぞれ、地元の大学が中心になって、地域学習のプログラムを提供し、これからのまちづくりも含んで作り上げるのも良いのではと思います。東京23区の姿形は実に多様です。

2020年、東京オリンピック・パラリンピックの開催に合わせて、東京23区の「地域学」を競うのも有りかもしれません。

中野遠望



(2014.11.25)

新宿遠望

